

令和7年度 第1回 挝斐川町学校教育の在り方審議会（議事録概要）

1 日 時 令和7年7月30日（水）<開会>14時00分 <閉会>15時30分

2 場 所 挝斐川町役場（3階）防災対策室

3 出席者

町 長 岡部 栄一

副 町 長 長屋 憲幸

総務 参与 今枝 文雄

通常会議委員 秋山 晶則、佐木 みどり、小林 直樹、大西 恵子、椿井 昭二、

徳永 恵理奈、中島 勝義、棄原 利樹、安藤 美香、森 允、

庄子 寛之

拡大会議委員 棚橋 慶士、太田 優芽、植山 あおい、久保田 織、柿木 啓輔、

若原 琴音

事 務 局 教育長 香田 静夫、事務局長 所 貴宏、学校教育課長 富山 哲成、

学校教育課課長補佐兼係長 高橋 由利、学校教育課係長 松浦 亮太

4 次 第

（1）開会挨拶（町長）

- 少子化が進んでおり、小学校において全学年単学級編成となっている。1クラスあたりの平均児童生徒数も17人となっているなど、小規模化が顕著である。また、平成17年には18校あった小中学校も、現在では9校となっている。こうした中で、今後の揖斐川町の学校教育がどうあるべきか、町民の皆様と議論する時期が来たと考えている。
- 学校の統廃合は非常にデリケートな問題であり、地域住民の皆様の合意を得ることは非常に難しい。また、組合立て設置している小学校があるため、その在り方を考える際には先方との協議が必要となる。こうした状況から、揖斐川町学校教育の在り方審議会を設置し、学校の在り方について協議していくこととなった。
- 審議にあたっては、学校の統廃合や配置をどうするかといったことについてのみ議論するのではなく、本町にふさわしい特色ある教育やこれからの中学校に必要な教育の在り方など、子どもたちのよりよい教育環境の構築を第一に考えて審議を賜りたい。
- この審議会では2年間ご審議いただき答申をまとめていただくことになるが、委員の皆様にはこれまでの経験や思いを忌憚なく出し、これからの中学校にあたっていただきたい。
- 最終的には、答申いただいたものを町長部局と教育委員会が責任をもって具体化していく。

（2）委嘱状の交付

- 町長より、通常会議、拡大会議それぞれの委員代表に委嘱状を交付する。

（3）委員の紹介

- 各委員より、自己紹介を行う。

（4）委員長及び副委員長の選出

- 揖斐川町学校教育の在り方審議会設置要綱第5条により、委員長に秋山 晶則委員、副委員長に佐木 みどり委員を任命する。

(5) 摂斐川町からの諮問

- 町長より、審議会に諮問を行う。
 - 摂斐川町における児童生徒数の推移を踏まえた適正規模、適正配置及び必要な教育環境の整備等に関する基本的な方針について、教育的視点、地理的条件や地域連携の視点、学校施設の適正化の視点、まちづくりの視点等を踏まえ、総合的にご検討願います。
 - 前号に掲げる基本的な方針を実現するための取組みについて、見通しを示すとともに、実効性のある具体策をご提言願います。
- これ以降、会議の進行は秋山委員長が行う。

(6) 概況説明（教育長）

- 審議会事務局の職員紹介を行う。
- 摂斐川町の学校教育の現状と課題について、「町の概況」「これまでの学校再編」「小中学校の現状」「児童生徒の状況」「学校の特色ある教育」「教育の更なる充実に向けて」の6つの観点から説明を行う。

(7) 意見交流

委員：少子化が進んでおり、今後移住者が増加し子どもが大幅に増える可能性もほぼないと思われる。統廃合について検討する場合、通学距離の問題はあるが、友人関係の構築を考えると小学校でも一つの学年に70～90名ほどの子どもがいる方がよいと考える。であれば、統合はせざるを得ないのでないのではないか。

委員：私の通う学校は全校生徒が比較的少ない。まとまりがあり、自分たちで提案した活動に取り組みやすいというよさもあるが、高校へ進学した場合に1クラスあたりの生徒数が大幅に増えることによる驚きもあると思われる。様々な人との交流による社会的な影響にも違いがあると思うので、小中学校の頃から社会性を育てるため、1クラスあたりの生徒数を多くする方が良いのではないか。その方が、進学・就職した際にも自分たちにとって大きな力になると考えるため、統合した方がよいのではないかと思う。

委員：学校の適正規模という観点から小中学校の小規模化について考えることも必要だが、一方で摂斐川町の教育には伝統があり、県内市町村でも有数の教育のまちである。教育における様々な支援があるのも、摂斐川町のこれまでの取組みや教育に対する思いの結果だと思われるため、こうしたよさをどのように今後活かしていくのかについても考えなければならない。

委員長：諮問にもあるとおり、学校の適正規模・配置だけではなく、よりよい教育とは何か、といった質的な部分も一つの重要な議題になると考える。関連して、日本においても世界的にも教育観が転換しており、「探究」をキーワードに子どもたちが自分たちで地域について学んでいくような仕掛けを意識的に組んでいる。学校の規模の問題は外せない議題ではあるが、摂斐川町で学んでよかったと思えるような教育環境についても深掘りしていきたい。

委員：委員長の言うとおり、今の教育は、子どもたちの認知特性は様々だという立場から、何を育てていくかという点で転換が始まっている。そういう意味では、これまでの文化も大事ではあるが、まずは実際の教育において何を大事にすべきかを基盤として整

備したうえで文化について検討する、というように順序立てて整理すべきであり、混在したまま検討するのは難しいと考える。校区というものは地元の人にとって重要な意味をもっており、統廃合について納得していただくには教育のために必要な適正規模を示し、その中で文化をどのように大切にしていくのかを示す方が良い。また、人間関係やコミュニケーション能力、相互性を育むためにどの程度人数が必要か、という観点でも検討が必要である。

委員長：従来は学校という空間が物理的に閉じていたようなイメージがあるが、今はICTも含め、地域とつながるための様々な手段がある。学校という空間に集約されたことを理由にそこで完結させるのではなく、揖斐川町という大きな空間で地域を探究の場として活用していくなど、さまざまな可能性を検討していくことが大切である。

委員：学校ではタブレットを活用しており、学校や教科書から得られる知識だけではなく、タブレットから得られる情報もある。クラスメイトと話すことなど、学校に行くことでできることもあるが、今は学校だけではない色々な学びの形があると思う。

委員：説明の中で、揖斐川町はICTの活用という面で全国平均を上回っているという点が面白いと感じた。数か月前に探究活動の前段階として生成AIなどの最先端技術の活用方法を学び、今は探究活動の内容をまとめる段階に入っているが、ただ受け身で聞く授業に加えて、自発的な探究で使うツールとしてICTを活用するのは効果的と考えている。このICTのように、揖斐川町がもつよい特色は長所として伸ばすべきであり、そうした視点もあると良い。

委員：まず、他市町村の学校に進学して、育ってきた環境が自分は非常に恵まれていると感じている。友人から小中学校での経験を聞くこともあるが、揖斐川町では他者との関わりが強く、互いに認め合っているような感覚がある。次に、小中学校の間に自分が好きなことを見つけられる教育があるとよい。例えば私は英語に興味があるが、そうしたものが見つけられると将来のことを考えやすくなる。最後に、文化の話に関連して、揖斐川町は歴史や文化に恵まれた環境なので、そういったことに子どもたちが関わる機会が増えると地元をより愛せるだろうし、それにより将来的に地元に戻ってくる人が増えるのではないか。そういう観点から、ふるさと学習のような地元学習を増やすとよいと考える。

委員：もはや校区のことをあまり意識する必要はないのではないか。例えば、揖斐小学校の子どもが谷汲小学校で一緒に勉強するなど、揖斐川町全てが一つの小学校という考え方で、児童生徒や住民が行き来し、相互交流するような教育の在り方も良いように思われる。

委員長：校区はおそらく生活圏とつながっており、そこで育つ意味を経験的にもっているために様々な思いが湧くのだと思うが、一方で町全てが一つの校区であり、町民総掛かりで子どもを見守っていくという視点は今後非常に大切だと思われる。こうした視点についても答申に添えていくべきである。

委員：他のこうした審議会にも出ているが、このように和やかな会議は初めてで、多くは始まる際に地域の方々が反対の立場から発言される。賛成の立場と反対の立場それぞれの考え方があるが、まず論点になり得ることとして、人口減少への対応ということが考えられる。揖斐川町と都会では、住むにあたって異なる点として何が考えられるか。

委員：私自身は揖斐川町が好きで都会は自分に合わないと思うが、例えば就職したい職業を考えた場合、通勤時間などを考慮すると揖斐川町を出ざるを得ず、住むことができな

いということは考えられる。

委 員：学校教育の在り方という枠組みを超えた内容かもしれないが、今のような意見を踏まえ、人口減少という問題に対し人口の増加を目指すのか、それとも歯止めをかけるために何か施策を行うのかという視点は大切になると考える。賛成の意見が多く感じるので、反対の立場から言われることについて話をすると、通学距離の問題や、クラスの人数について、多いことのメリットだけではなく少ないことのメリットもあるという点は議論の対象になる。また、やはり地域住民の中には地域の学校をなくしたくないという意見があると思われるため、地域の人たちの意見をしっかり聞く必要がある。さらに通学バスの運転手の問題もあり、始業時間に間に合うように送迎するために早朝から運転してくださる方がいらっしゃるか、ということも課題になる。他市町村では統合をせずに、ICTを活用して複数の学校が同時に授業を行っているところもあり、そうした事例も踏まえて本当に統廃合が適正か検討することが必要である。

委 員：こうした和やかな会議は珍しいとのことだが、やはり揖斐川町の住民は町が好きであり、地域の活動をされている方も多い。そのため、町全体をよりよくしたいという思いが強く、統廃合についても致し方ないと考えているのではないか。また、先ほど町内の就職先の話があったが、確かにインフラに特化した企業が多く、業種という観点で就職先が少ないという特色は確かにある。結論があるわけではないが、そうしたことからやはり人口減少に歯止めがかからないのではないかと思うので、ぜひよい方向に進んでほしいと思っている。

委 員：様々な意見を聞いていて、「学校をいくつにするか」ということは、「どの学校に所属するか」ということではないかと感じた。いびがわ学園構想という話があったが、ICTの活用も含め、この構想を活用して揖斐川町としての学びの形をまとめていくとよいと思われる。その際、この構想の中に地域交流センターや歴史民俗資料館、スポーツ施設、公民館などの様々な文化的施設も入れ込み、揖斐川町の子どもたちはこの学校に所属するが町全体で色々なものを活用しながらみんなで学んでいる、という形をつくっていくとよいのではないか。

委員長：世界的には「オーセンティック」、日本語では真正な学びと呼ばれる考え方に向かっており、その場限りの知識ではなく概念として使えるレベルまで向上させる教育に取り組まれているが、こうした学びをする上で揖斐川町には教育資源がたくさんある。だからこそ、この審議会での議論を通じて、よりよい方向性を練り上げていきたい。それでは、進行を事務局へお返しする。

(8) 閉会挨拶

- ・ 事務局長より、閉会の挨拶を行う。
 - ・ 第2回審議会は通常会議であり、10月9日（木）14時00分より実施する。次回の拡大会議は12月末を予定している。

以上、閉会